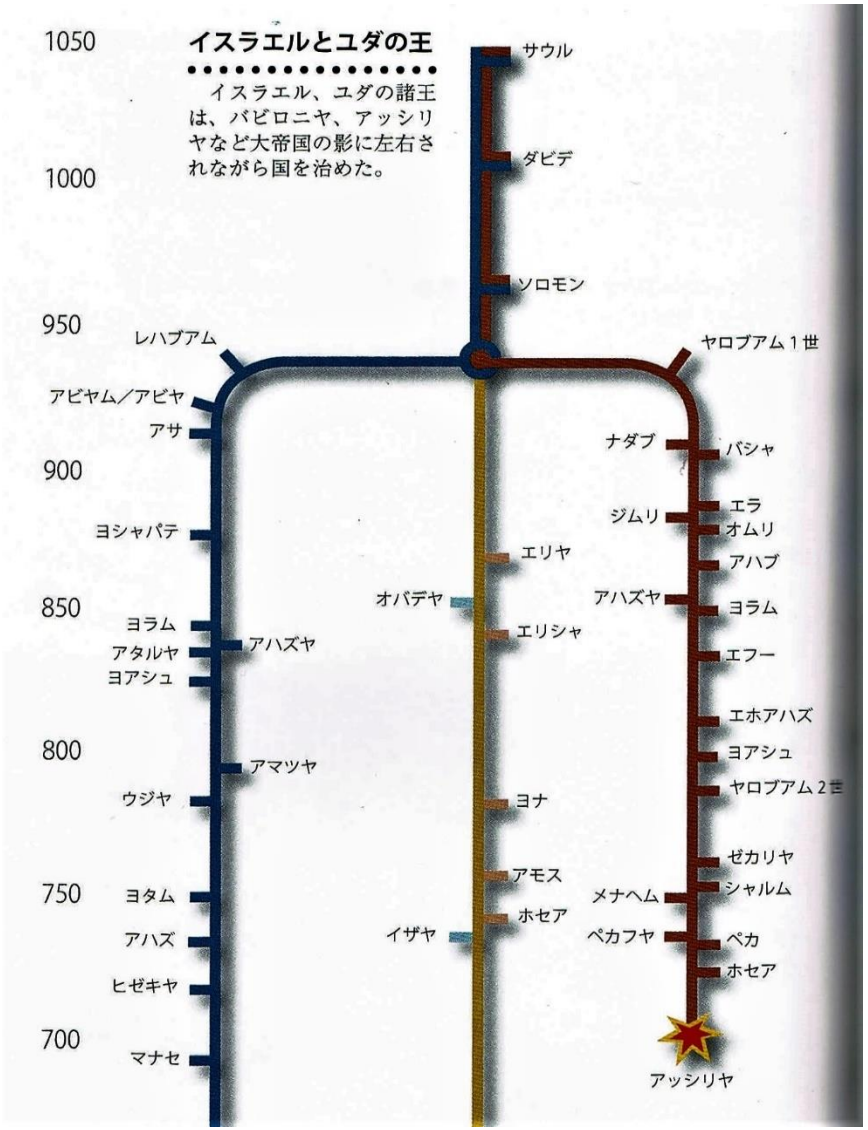

2022年8月14日　説教「主の御心を求める」

列王記第二3章1～12節

エリヤを継承して働くエリシャはどのように用いられていくのでしょうか。

1．ヨラム王の治世に（1～3）

①ヨラムが王に（1）**「ユダの王ヨシャパテの第十八年に、アハブの子ヨラムがサマリヤで王となり、十二年間、王であった。」**南王国ユダの王ヨシャパテの在位は既に 18 年。北王国イスラエルはアハブの死後、アハズヤが王位を継承していましたが、1 章で見てきたように、アハズヤはエクロンの神に身をゆだね、預言者エリヤの働きを通して、主のさばきを受けました。その後に王となったのがヨラムです。彼はアハブ王の子で、アハズヤの弟でした。ヨラムは 12 年間、王の地位にありました。

②バアルの石の柱を除く（2）**「彼は主の目の前に悪を行ったが、彼の父母ほどではなかった。彼は父が造ったバアルの石の柱を取り除いた。」**ヨラム王も、主なる神の前に忠実であるとは言えませんでした。しかし、父アハブや母イゼベルほど、不信仰ではありませんでした。その一つの証拠として、彼は父アハブが造った偶像神バアルの石の柱を取り除いたのです。それは、自覚的行動でした。

③ヤロブアムの罪を（3）**「しかし、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪を彼も犯し続け、それをやめようとはしなかった。」**しかし、南北に分かれた時の、最初の北王国の王ヤロブアムの罪については、これを犯し続けました。金の子牛を礼拝する行為でした。ヤロブアムにとって、それは北王国レハブアムへの対抗として、始めたものでした（Ⅰ列 12:25～）。　北王国イスラエルが受け継いできたものでもありました。ヨラムはこれを止めようとせず、不徹底でした。

2．モアブを攻める道（4～8）

①モアブの王の背き（4～5）**「モアブの王メシャは羊を飼っており、子羊十万頭と、雄羊十万頭分の羊毛とをイスラエルの王にみつぎものとして納めていた。しかし、アハブが死ぬと、モアブの王はイスラエルにそむいた。」**さて、話はモアブの王メシャのことになります。これは、第二列王１：１にからつながっています。モアブはヨルダン川の東側にあり、ルツ記にもあるように民族的にもイスラエルの民とは異っていました。その地の王メシャは子羊十万頭、雄羊十万頭分の羊毛をイスラエル王に貢いでいました。そのような力関係であったということです。しかし、アハブ王の死去から、イスラエルに背いて、この約束を履行しなくなったのです。

②ユダ王を誘い（6～7）**「そこで、ヨラム王は、ただちにサマリヤを出発し、すべてのイスラエル人を動員した。そして、ユダの王ヨシャ**

パテに使いをやって言った。『モアブの王が私にそむきました。私といっしょにモアブに戦いに行ってくれませんか。』ユダの王は言った。『行きましょう。私とあなたとは同じようなもの、私の民とあなたの民、私の馬とあなたの馬も同じようなもので。』」アハズヤの時代は継続されていたかもしれません。ヨラム時代になって、貢物を要求するとそれがなされたかったのでしょう。そこで、ヨラムはサマリヤを出て、イスラエルの人々を動員したのです。また、ユダ王ヨシャパテにも協力を求めました。ヨシャパテは応じます。「私の民とあなたの民・・・」という言葉は、あの時と同じです。つまり、ヨラム王の父アハブ王からアラムとの闘いのために協力を要請された時にも同様にして受け入れたのです。

③エドム荒野道を**「そして、言った。『私たちはどの道を上って行きましょうか。』するとヨラムは、『エドムの荒野の道を』と答えた。」**そして、ヨシャパテが「どの道を上っていきますか」と尋ねると、南のエドムの荒野の道を通っていきましょう、というのがヨラムの答えでした。王としては経験豊富なヨシャパテが、協力を受け入れるばかりでなく、方針についても経験に乏しいヨラムより下手に出るというのはどういうことでしょう。ヨラムの力量や人物を試していたのでしょうか。

３．**ヨラムと二人の王（9～12 節）**

①七日間の回り道（9）**「こうして、イスラエルの王は、ユダの王とエドムの王といっしょに出かけたが、七日間も回り道をしたので、陣営の者と、あとについて来る家畜のための水がなくなった。」**こうして、イスラエルのヨラム王はユダのヨシャパテ王とエドムの王とモアブに向かいました。しかし、なんと行っても、南から辿るのは回り道。七日も費やしてしまったのです。問題は従軍した者達と家畜の水がなくなり、おそらくは食料も不足してしまったことです。

②ヨラムの嘆き（10）**「それで、イスラエルの王は、『ああ、主が、この三人の王を召されたのは、モアブの手に渡すためだったのだ。』と言った。」**ところが問題は、ユダとエドムの王達を誘ったイスラエルの王ヨラム自身の弱気です。「ああ、主が・・・」と言っていますが、ここで主なる神を持ち出していますが、安易です。「三人の王を召されたのは、モアブの手にわたすためだったのか」と、主の権威を重んじているようでいて、信仰によるものとは見えません。それぐらいは、想定して進み始めたのではなかったのでしょうか。それとも、二人の王に甘えているのでしょうか。

③ヨシャパテの要望（11～12）**「ヨシャパテは言った。『ここには主のみこころを求めることのできる主の預言者はいないのですか。』すると、イスラエルの王の家来のひとりが答えて言った。『ここには、シャファテの子エリシャがいます。エリヤの手に水を注いだ者です。ヨシャパテが、『主のことばは彼とともにある。』と言ったので、イスラエルの王と、ヨシャパテと、エドムの王とは彼のところに下って行った。』**。困り果てたヨラム王はすっかり否定的になってしまっています。そこに、ユダのヨシャパテ王は「主のみこころを求められる主の預言者がいないのか」と問います。するとヨラムの家来の中で、「エリシャがいます。彼はエリヤの手に水を注ぎました。」と応えました。すると、ヨシャパテは、「主のことばは彼とある」と述べ、三人はエリシャの所に向かったのです。

《結論》預言者として、エリヤを継承したエリシャ。彼はサマリヤにあって主に仕えていたのでしょう。さて、エリシャが住んでいた北王国イスラエルにおいて、王がヨラムの時代となりました。信仰において、父母よりはましでしたが、偶像に心を向けるという点では先祖ヤロブアム以来のありかたを受け継いでいました。彼の時代になって、ヨルダン川の向こうの地モアブが、イスラエルに背き始めたのです。そこで、彼は南王国ヨシャパテやエドムの王にも加勢を願い、それを受け入れてもらうのです。王として経験の浅いヨラムは、モアブと相対するには、力量において不十分でした。まずは、ヨシャパテに進む道を聞かれた時に、エドムの荒野の道をと答えました。それは熟慮したものではなく、どうも思い付きであったようです。結果としては、自らの軍と加勢してくれているユダやエドムの国の軍の兵や家畜を疲弊させてしまいます。水や食料に不足が生じれば、兵達の士気が下がることは明らかです。距離だけではなく、地形などにおいてもよく調べておく必要がありました。

ヨラムはこうした事態に陥って、意気阻喪してしまい、「主がこの三人の王を召されたのは、モアブの手に渡すためだったのだ。」などと戦う前から弱気をもらしているのです。主なる神は、イスラエルの民が約束の地に入る前に、モーセの後継者ヨシュアにこのように言われました。「強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたと共にあるからである」（ヨシュア記 1:9）。ヨシュアは主から信仰の励ましをいただいて、前進を始めました。

今、ヨラムはどうしたら良いのかわからない状態でした。その時にヨシャパテは言います。「ここには主の御心を求めることができる主の預言者はいないのですか」。ヨシャパテはヨラムの父アハブにも預言者の存在を確かめたことがありました（Ⅰ列王 22）。その面で、ヨシャパテは最も大切な方向付けを示したのです。つまりは、これからモアブの王や民と相対するにあたって大切なことは、主への信仰であり、信仰に基づく精神と御言葉であることを訴えているのです。結果として、預言者エリシャの名がここに出てくることになるのですが、ここではヨラムが改めて主の前に立つことが促され

ていると思われます。

私たちも、ヨシャパテが預言者に主の御心を求めていったように、まずは主の御心をたずね求めたいのです。御心は、私たちの中では平安と喜び、願いなどがあるとともに、主は御言葉を通して示してくださいます。ヨシュアも「この律法の書を、あなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない。」（ヨシュア 1:8）と教えられていますが、御言葉の裏付けをもって、主の御心を示していただかなければ、戦うこともできないのです。今、あなたが置かれている場所は、まさに戦場です。その戦いに向かうには、御心に従って進む信仰が必要なのです。そうでなければ空元気となり、すぐに止めてしまおうとするでしょう。「主よいのちのことばをあたえたまえ」（讃美歌 187）と歌いつつ、この馳せ場へと出て行こうではありませんか。

主があなたとともにいてくださいますように。